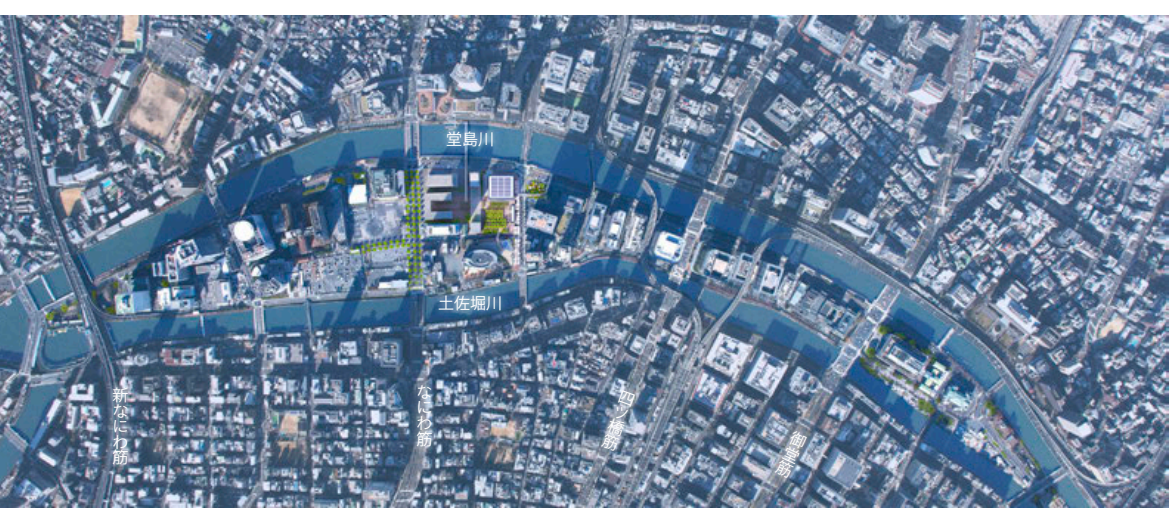


MUSEUMS FOR GREATER OSAKA

大阪ブランドを世界に打ち出す「場」を創る

大阪新美術館の大きな目標は、3つの「場」*を創り出すことによってさまざまな連携と交流を織り込み、大阪市がロンドン、パリ、ニューヨークに伍する文化都市となることである。「アートが動くまち。 アートが動かす大阪。」



配置計画

敷地全体に100年を見据えたパブリックスペースを創る

- 展示収蔵棟を敷地いっさいに寄せて建てる。4丁目の核となる「彫刻広場」を創り、国際美術館、科学館、西に誘致される「中之島アゴラ」と、この新美術館をつなぐ。
- 遺構上部に展示収蔵棟を浮上させ、その下に多彩なイベントが開催可能な「舟入広場」を創り出す。
- 「彫刻広場」を、3丁目の「四季の丘」から、4丁目の「中之島アゴラ」を経て、5丁目へと延びゆく東西歩行者ネットワークの要とする。

*大阪新美術館が創り出す3つの「場」

- A¹—世界に誇るコレクションを展示収蔵する「場」
- A²—3つのミュージアム群を連携させる「場」
- A³—中之島全体の相乗効果で発信力を強める「場」



外構計画

季節を彩る「彫刻広場」の緑と南北の川をつなぐ桜並木

- 国際美術館と展示収蔵棟の間に85mの離隔をとり、「中之島アゴラ」ともつながる5,300㎡のオープンスペース「彫刻広場」を生み出す。高木105本の木漏れ日の下で散策を楽しめる。
- 「彫刻広場」を3つミュージアムに囲まれた中庭と位置づけ、新美術館と国際美術館、科学館の連携を強める。
- 「彫刻広場」に面してレストランとテイクアウトできるカフェを設置。テラス席に加え、緑陰のベンチが500人分の客席となる。
- 敷地東側には南北230mの桜の通り抜けを配置する。二列並木が堂島川と土佐堀川を結び、四季の丘と「彫刻広場」の広がりをつなぐ。
- リバーフロントを臨む展示収蔵棟から、北は堂島川、東は四季の丘、南は「彫刻広場」へのパノラマ眺望が得られる。全方位に新美術館の存在を主張できる建物配置。



国際美術館、科学館、中之島アゴラをつなぐ、4丁目の核となる「彫刻広場」



舟入の歴史を包み込み、未来へと力強く漕ぎ出して、大阪ブランドを世界に打ち出す新美術館

意匠計画

周辺と調和し共鳴する、四方正面の外観

- 展示収蔵棟外壁の金属パイプは国際美術館の造形と呼应する。
- 「なみはや」の「浪」を想起させる外観は、新美術館から情報や文化の波を発信する様子を表す。
- 「彫刻広場」下の基壇デザインが国際美術館、科学館との連続感を生み出す。



四季折々の木漏れ日の下でアートを楽しめるパブリックスペース



土佐堀川と堂島川をつなぐ230mの桜並木



多機能天井からのプロジェクションによる舟入遺構の再現イベント

美術館の枠を超えた「舟入広場」

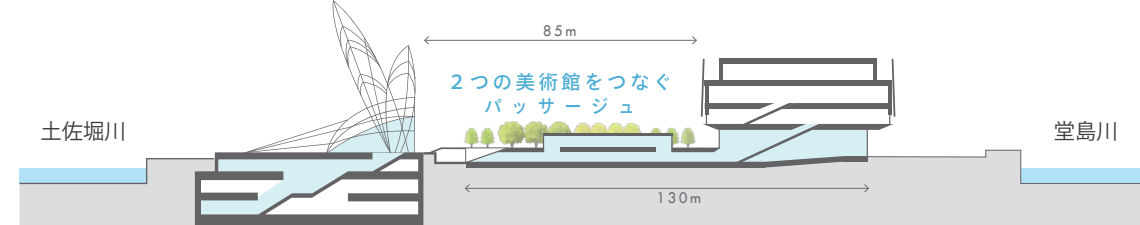
- 3,200㎡、天井高さ10.8mの「舟入広場」は、イベント用吊物に対応できる多機能天井仕様とする。
- PFI事業者が、大型インスタレーションやプロジェクションマッピングなどを使った多彩な収益事業を一年を通じて企画・運営できる。
- 展覧会の入場待ち行列ができて、パッサージュの外に延びても、「舟入広場」でストレスなく待つことができる。
- 展示収蔵棟は大阪大学中之島センターと、16mの間隔をあけて、「舟入広場」西側の柱を無くし、「中之島アゴラ」までを面的につなげる。
- 将来「舟入広場」に命名権を導入することも可能。



外部空間を活かした屋外展示イベント

最高クラスのホワイトキューブ

- 企画・コレクション展示室の移動展示壁は幅5.4mを標準とする。ジョイント目地の少ない展示壁面が理想的なホワイトキューブを創る。
- 展示ロビーは展示室と同じ高さのグリッド天井をシームレスに連続させ、ロビーを含めた展覧会計画が可能。
- 展示収蔵棟をサービス施設から独立させ、美術品の安全確保、防虫害対策に万全を期し、公開承認施設、美術品保障制度の要件を満たす。



「光の饗宴」の季節にはアイススケートリンクとして大阪の新名所が生まれる



テーマ展示室 展示ロビーにもグリッド天井が連続し、一体的に利用できる

